里親ショートステイについて

SOS 子どもの村 JAPAN　松﨑佳子

福岡市は、子育て短期支援事業（子どもショートステイ）を子どものパーマネンシー保障の一環として、児童養護施設や乳児院での受け入れ体制の強化とともに、里親ショートステイに先駆的に取り組んでいる自治体となっている。取り組みの強化とともにショートステイのニーズは増加し続けており、潜在的ニーズは非常に大きいと考えられる。

里親ショートステイは、SOS 子どもの村が全国調査を行った 2020 年時では、全国市町村のなかでの認知度も低く、取り組んでいる自治体はわずかであった。しかし、2022 年度より市町村が直接里親への依頼が可能となったこともあり、地域子育て支援の中核事業の一つとして取組む自治体が増加してきている。

SOS 子どもの村 JAPAN のこれまでの取り組みのなかで感じている里親によるショートステイの意義、課題について提案する。

家庭（里親）養育推進の観点から、

①ショートステイ里親は、短期であれば社会貢献として自分も活動できるのではないかという里親への敷居を低くし、里親登録推進を図ることができている。

②新規登録里親にとって短期で経験を積んだのち、長期養育に臨むことができる体験となる。

③登録はしたもののさまざまな事情で未委託となっている里親の養育委託への足掛かりにもなる。

④養育里親の経験のなかで里子が成長または自立後に、ショートステイ里親として続けて養育していくことができる。これは、里親という生き方のライフサイクルモデルとなる。

地域の家族・子ども支援の観点から

①地域で困難を抱えた親子を身近な地域の里親が支えることで、こまったことがあれば頼ることができると言う安心感（親戚ができたような）を持ちながら子育てできる。

②里子を養育した経験を家族支援に生かしていくことができる。特に社会的養育を要する子どもたちに必要なアタッチメント、発達障害、トラウマなどについての体験的理解がある里親が多いことは大きな支援となる。

③・里親が持っている地域資源（公民館、子どもプラザ、講演、各種相談機関、近隣住民等）をショートステイ利用親子が利用する機会ともなり、日常の中で親子を支える地域資源が増えていく（フォーマルな支援とインフォーマルな支援が重なり、重層的に家族を支えていくつながりができていく）。

④・社会的養護を担っている里親が、地域で家族支援をしていることが近隣住民に伝わっていくことで、地域で子どもを見守っていく社会的養育の風土の構築に貢献する。

⑤在宅支援は、「親支援」に焦点が当たりがちであるが、里親がショートステイを受け家族支援をしていくことで、子どもを見ている里親の意見から「子ども支援」にも焦点を当てて、「家族全体」を支援する視点が生まれている。
⑥子どもにとって里親ショートステイ期間中、保育園・幼稚園・小学校などへの送迎があることで、日常生活との一貫性が保障される。
⑦自分の家庭とは異なる家庭生活のなかで新しい体験をする。
課題として
①里親には、子どもに寄り添う力、安全な受け入れ、利用者（親）との良好な関係が求められる。また、1～７日の短期預かりの中で子どものアセスメントやケア、しつけなどを行う。　そのためには、従来の里親研修に加えて、ショートステイに特化した研修が必要でる。
②区、利用者、ショートステイ里親との連絡調整は、一人ひとりの家族や、里親の状況に応じてマッティングが必要であり、コーディネーターのソーシャルワーク力が質、量ともに求められる。
③里親ショートだけでなく、児童養護施設や乳児院等でのショートステイなどのシステム作りが必要である。